

Nejirebane, No. 74 15.Dec., 1996

## 山屋茂人氏蒐集の珍しいコメツキムシ

岸井 尚

〒533 大阪市東淀川区東淡路1丁目5 4-923

本年の春先に、長岡市立科学博物館の山屋茂人氏の来訪を受け、その際コメツキムシ科甲虫資料の同定を依頼された。興味あるものが多数含まれており、記録に価すると思われる大変面白いものが多いので、何らかの雑誌に報告されることをお勧めしたのだが、なかなか多忙のようで、新潟県関係以外のものはどうもという様な意向を示された。

以下に報告するものはすべてではないが、特に各行政区域での未記録種および珍しいものだけに限り記録するものである。また、必要と思われるものについては新潟県下産のものも一部含めることとした。

ここで記録される資料はすべて原則的には、長岡市立科学博物館に所蔵されるが、一部重複標本については筆者が保管している。

*Agrypnus (Sabikikorius) fuliginosus* (CANDÈZE, 1865) ホソサビキコリ

1♂, 鹿児島県下甕島雄岳, 3.VI.1993, 中林博之 leg.

離島からの記録は多く伊豆諸島・対馬・五島列島・口永良部島などからの報告はあるが甕島諸島からは初めてと思われる。

*Agrypnus (Colaulon) amamianus* (KISHII, 1974) アマミヒメサビキコリ

1♀, 沖縄県沖縄本島国頭村, 27.VII.1990, 久保田博道 leg.; 1♀, ditto, 15.IV.1993, ditto.

*Colaulon* に属するものには後翅が飛翔可能な長翅の種群と退化短翅の種群とが知られておりどちらも今日までに多くの種または亜種が報告されているが、沖縄本島からは長翅のものゝ確実な記録はない。奄美大島に日本本土に広く分布する *scrofa* の類似種 *amamianus* が南西諸島に分布する

唯一の長翅型種として知られており、上記2頭の雌個体はこれによく似ていて同種と見られるが、沖縄本島固有の亜種である可能性も捨て難い。雄資料が得られてから改めて検討して見たい。

*Lacon (Alaotypus) yaeyamanus* (MIWA, 1934) ヤエヤマサビコメツキ

1♀, 沖縄県与那国島空港近傍, 27.IV.1991, 中林博之 leg.

名前のようにこの地域に広く分布するものであるが、与那国島からの記録は初めてである。

*Heteroderes kusuii* OHIRA, 1994 トカシキヒラタチビコメツキ

1♀, 沖縄県沖縄本島国頭村, 15.VIII.1993, 久保田博道 leg.

台湾に普通に分布する甘蔗根系の害虫である *H.changi* にとてもよく似た種である。最近記載されたばかりの種で、沖縄本島南方の慶良間列島に属する渡嘉敷島を原産地とする種で、記載内容によく一致する形態をもつのでこれと同じ種と思われる。台湾やその他のアジア諸地域には同系の種が多く、いずれも甘蔗系植物の根系を食害するものが多い。そのためと思われるが、一般に個体密度が高いのが普通であるので、これまで知られていなかったのが不思議な気がする種である。

*Homotechnes motschulskyi alpicola* (KISHII, 1968) アサヒミヤマヒサゴメツキ

1♂, 新潟県朝日岳五輪高原, 16.VIII.1991, 須藤弘之 leg.

新潟・富山・長野の県境地帯の高山地域に分布する亜種で、多くの亜種群の中ではもっとも小型のものの一つである。

*Megapenthes azumai* ARIMOTO, 1990 アズマツヤケシコメツキ(?)

1♀, 沖縄県沖縄本島国頭村与那, 26-29.V.1990, 久保田博道 leg.

台湾に極めてよく似た未記載種が3種ほどあるが、最近石垣島と西表島から雄個体に基づいて記載された上記種が形態的にはよく一致するようである。多分に大形なのでいささか疑問もあるが、このグループの種では性差として他にも例はあるので、同種と考えて良いものと思われる。ただ沖縄本島は地域的に大分離れているのと、色彩的に原記載表現とやや異なる点があるので、あるいは別亜種と見なすべきかもしれない。

*Ampedus (Pseudelater) carbunculus* (LEWIS, 1879) ヒメクロコメツキ

2♀♀, 鹿児島県下甕島雄岳, 9.VI.1993, 中林博之 leg.

本邦特産で、しかも分布域は広く附属諸島の多くからも普通に得られる種であるが、甕諸島からの記録はないようである。なお、この種が真の *Pseudelater* 亜属のものではないことは疑う余地はなく、新しく別亜属の創設が必要でないかと考えている。

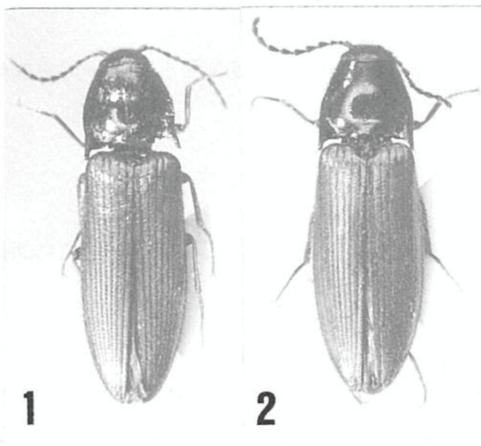
*Ampedus (Pseudelater) nikkoensis* (OHIRA, 1973) ニッコウアカコメツキ

1♂, 1♀, 新潟県糸魚川市うど沢, 27.V.1990, 山屋茂人 leg.

従来の記録は原産の栃木以外では、静岡からの報告があるのみで、新潟県からは初めての記録となる。

*Ampedus (Ampedus) echigo* KISHII, 1991 エチゴチャバネコメツキ

1♀, 新潟県苗場山和田小屋, 6.VII.1993, 山屋茂人 leg.; 1♂, ditto, 13.VII.1993, ditto; 1♂, 1♀, 新潟県苗場山下ノ芝, 25.VI.1987, ditto; 2♂♂, 新潟県妙高山群黒沢岳, 1.VII.1993, ditto; 1♂, 新潟県苗場山中里村小松原湿原, 28.VI.1990, 山崎托二 leg.; 1♂, 新潟県藤平町守門岳, 28.V.1985, 山



1. エチゴチャバネコメツキ; 2. ミヤマチャバネコメツキ



屋茂人 leg.; 1♀, 新潟県栃尾市守門岳入塩川, 18. VI. 1987, ditto; 1♂, 福島県田子倉浅草岳, 12. VI. 1988, ditto.

苗場山からの山屋氏採集によるただ一頭の雌資料に基づいて, 1991年に記載したものであるが, 今回上記のように多数の資料を見ることができたものである. 上越の山岳地に広く分布しているものようである.

*Ampedus (Ampedus) amakazaricola* KISHII et OHIRA, 1956 ミヤマチャバネコメツキ

1♂, 新潟県湯沢町八木沢, 3. VI. 1988, 山屋茂人 leg.; 1♀, 新潟県苗場山下ノ芝, 13. VII. 1993, ditto.

現在のところ新潟県以外から取れた例はないようであるが, そんなに珍しい種でもないと思われる.

*Ampedus (Ampedus) alpicola* SILFVERBERG, 1977 ミヤマアカコメツキ

1♀, 長野県小谷村カマ池, 17. VI. 1990, 須藤弘之 leg.

甲信越から関東・東北の山岳地帯に広く分布し, 北海道からの報告例もあるが, 個体密度は低いように思われる.

*Ampedus (Ampedus) orientalis* (LEWIS, 1894) アカコメツキ

1♀, 新潟県佐渡ヶ島金山, 26. VI. 1991, 山屋茂人 leg.; 1♂, 新潟県佐渡ヶ島金井町, 14. III. 1989, 山屋茂人 leg.

邦産のアカコメツキ類は現在, 亜種を含めると50を越えると見られるほど多くのものが知られるようになったが, その中でもっとも分布域が広くかつ棲息密度も高い種であるが, これまで附属離島からの記録を見ない. 上記の佐渡ヶ島も初めてのものであるが, 生殖器構造で本土産のものとは幾分異なる点が見られる.

*Ampedus (Ampedus) yagishiriensis* OHIRA, 1986 ヤギシリアカコメツキ

1♀, 北海道北見市, 24. VI. 1992, 加藤敏行 leg.

種名のように北海道の焼尻島からの資料で記載されたが, 後に奥尻島および北海道本土での分布も知られるようになった.

*Ampedus (Ampedus) pachycollis* OHIRA, 1973 フトアカコメツキ

1♀, 新潟県湯沢町八木沢, 17. VII. 1993, 山屋茂人 leg.

北海道および東北・関東・中部の山岳地に広く分布することが知られてきたが, これまでに新潟からの報告例は見当たらない.

*Ampedus (Ampedus) sapporoensis* W. SUZUKI, 1985 マルムネアカコメツキ

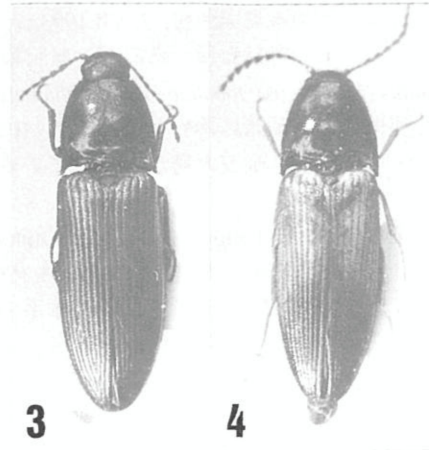
1♀, 北海道士幌町十勝三股, 25. VII. 1990, 須藤弘之 leg.; 1♀, ditto, 28. VII. 1990, ditto; 1♀, 北海道上川町三国峠, 27. VII. 1993, ditto.

三輪勇四郎博士が1927年に札幌産のアカコメツキに基づき *Elater rotundicollis* と命名記載された種であるが, 1985年に鈴木互博士の研究で種小名が SAY (1825) に先取されていることが分かり, 上記種名に変更されたものである. 長くこの種の実体が不明であったが, 北海道各地に比較的広く分布している種である.

*Ampedus (Ampedus) kibane* KISHII, 1994 エゾキバネコメツキ

2♂♂, 北海道置戸町中里, 13. VII. 1993, 加藤敏行 leg.

最近筆者が記載したものであるが, 邦産種とし



3. マルムネアカコメツキ; 4. エゾキバネコメツキ

ては特徴のはっきりした種で、上翅色彩は明瞭な黄色で北米産の *A. nigricollis* やヨーロッパ産の *A. ochropterus* とよく似たものである。今回採れたものの一頭は上翅後半部が菱型状に黒ずんでいた。なお雌は未知である。

*Ampedus (Ampedus) nubatama* KISHII, 1988 ヌバタマクロコメツキ

1♂, 福島県いわき市三和町上枝, 10.X.1990, Y.松崎 leg.; 1♂, 新潟県湯沢町八木沢, 1.VI.1991, 山屋茂人 leg.

1988年に福島および京都産の資料で記載して以来再報はなかった。しかし、そんなに少ないものとは思えぬ種である。多分近似の別種などと混同されている可能性が強いと思われる。新潟県からは初の記録である。

*Ampedus (Ampedus) vestitus vestitus* (LEWIS, 1894) ケブカクロコメツキ

1♀, 福島県いわき市三和町上枝, 3.VI.1989, Y.松崎 leg.

東北地方ではこれまで岩手と秋田からの確実な報告例があるのみであった。

*Ampedus (Ampedus) tamba* KISHII, 1976 タンバコクロコメツキ

1♀, 福島県いわき市小川町竹渡, 25.VII.1995, Y.松崎 leg.

分布の中心は近畿地方であるが、北海道・青森からの報告例もある。しかし福島県からは初の記録と思われる。

*Ectinus obscurolineatus* KISHII, 1979 コゲチャムナボソコメツキ

1♀, 鹿児島県田代町稲尾岳, 5.VI.1993, 中林博之 leg.

富山原産の種で、新潟・長野・京都の標本も検しているが、九州南端地域の分布は考えられなかった。*E.longicollis* に極めて近い種であるが雌貯精囊内の角質板形状などで区分できる。資料は本州産のものに較べて上翅の暗色化が著しいが、一般に *Ectinus* の黄褐色の上翅を持つ種で、暖地で暗色になる傾向が強いのは筆者 (1984) が既に指摘したが、本種にもその傾向があるようである。

*Chiagosnius akashii* OHIRA, 1969 ズアカクロツヤコメツキ

1♀, 沖縄県波照間島, 2.V.1991, 中林博之 leg.

波照間島からは初の記録と思われる。

*Parasilesis shirozui* (KISHII, 1959) シロウズクチプトコメツキ

1♀, 鹿児島県喜界ヶ島アガレン, 5-7.VII.1989, 中林博之 leg.

従来の記録は奄美大島(原産地)と加計呂麻島があるのみである。

*Melanotus (Spheniscosomus) masakii* KISHII, 1975 マサキオオクシコメツキ

1♂, 沖縄県沖縄本島国頭村, 7.VII.1993, 久保田博道 leg.

形態的に区別の容易な種であるが、原記載以来再報のなかったものである。

*Melanotus (Melanotus) lochooensis tanchamelis* OHIRA, 1967 タンチャメクシコメツキ

1♂, 鹿児島県奄美諸島喜界ヶ島ゼンタ, 10.IV.1994, 中林博之 leg.

トカラ列島および奄美大島から知れている亜種で、これまでに喜界ヶ島からの報告例は見えない。

*Melanotus (Melanotus) satoi okinawensis* OHIRA, 1982 オキナワカンシャクシコメツキ

1♀, 沖縄県久米島ゼンタ, 10.IV.1994, 中林博之 leg.

南西諸島に広く分布する著名な甘蔗根系の害虫で3亜種に分化しているが、久米島からの記録はなく上記亜種に入るものと思われる。

(きしいたかし)



## ちょっと気になる甲虫の情報一 (II)

原色日本甲虫図鑑(III) (保育社 1985)のPL27図27に、まんまるのマンガチックな顔をした愛らしい甲虫が図示されている。日本産は一科一属一種ということで、甲虫屋には気になる虫である。(水野)

キムネタマキスイ *Cybocephalus nipponicus* ENDRODY-YOUNGA

キムネタマキスイの記録

齊藤 琢巳

〒661尼崎市武庫之荘西2-36-24 松本マンション

キムネタマキスイは体長 0.9 - 1.4 mmと大変小さく、一般にはあまりなじみのない虫である。国内では本州・四国・九州・種子島・琉球から、国外では中国・インド・スリランカ・東南アジア全域とミクロネシアから記録されている。



キムネタマキスイ ♂

1995年4月2日、まだ寒さの残る薄曇りの昼下がり、ヒメテントウ類を探す目的で、神戸市北区の新興住宅街にあるケヤキ並木の樹皮下の採集を試みた、手伝っていた妻が非常に小さなヒメテントウが採れたと言うので、確認してみると、見たこともない真っ黒な虫が採れていた。ボール状に丸まるため、極小のタマキノコの一種かとも思ったが、とっさには判断しかねた。その虫を見つけた部位は、枝の折れたくぼみで、そこに潜んで冬眠していたようである。似たような条件下を探したところ、樹皮の裂け目に沢山のカイガラムシ(種不明)が群生しており、そのすぐ脇に数頭の同種個体を見ることができた。一頭だけ前胸背板が黄色い個体が混じっ

ており、それを見た瞬間、「これがキムネタマキスイか?」と思いついた。「たしか、雌は胸が黒く、雄が黄色だったかな?」と。そこで胸の黄色い個体を複数得るため、今度はカイガラムシを目印しに、木の陰になる部分や北側の樹皮の裂け目・枝の折れた跡・太い枝の又・樹皮下などを探した。カイガラムシが沢山付いている木の方がよく採れるが雌のほうが多い。またカイガラムシがついている木でも沢山採れる木とそうでない木がある。カイガラムシがついていればいいという訳でもないようだが、カイガラムシの沢山付着している付近に多く発見される。調べて見てこのケヤキは宅地開発時に植栽されたものであり、埼玉県川口市から移植されたものらしいことが判った。カイガラムシは周辺の雑木林のケヤキにはほとんど見られないが、並木のケヤキには植栽される前から付いていたかどうかは確かではない。しかしキムネタマキスイは植栽されたケヤキでのみ得られ、タマキスイとカイガラムシ両者の因果関係が示唆されているので、木とともにカイガラムシ共々移入されて来た可能性は大きい。以下に採集例を示す。

6♂♂17♀♀	2.IV.1995	兵庫県神戸市北区京地	齊藤琢巳・千恵子採集
1♀	6.V.1995	徳島県三好郡池田町	齊藤琢巳採集
4♂♂9♀♀	7.XII.1995	兵庫県神戸市北区京地	齊藤琢巳・千恵子採集

8♂ 15♀	12.II.1996	兵庫県神戸市北区京地	斎藤琢巳・千恵子採集
1♀	6.V.1996	兵庫県神戸市北区京地	斎藤琢巳採集
1♀	2.VI.1996	兵庫県神戸市北区京地	斎藤琢巳採集
1♀	19.VII.1996	兵庫県神戸市北区京地	斎藤琢巳採集



観察場所 (神戸市北区京地)

これらの記録の内 5月~7月以外は、目撃記録も含めると倍以上(雄雌比率は別の個体を認めている。暖かくなると分散してしまうためか、発見できる個体数は極端に少なくなり、冬季には樹幹や太めの枝にもいたものが、初夏の採集例では全て樹幹に付着したカイガラムシ周辺より得られている(新興住宅街という場所柄、ピーティングおよびスリーピングは積極的に行った訳ではないが、試みた範囲では採集されなかった。また秋季については採集を行っていない)。なお 四国(徳島県)の例では、竹の伐材の東のピーティング

で得られたが、カイガラムシとの関係は観察されていない。またそのときも周辺部のピーティングよっての追加はできなかった。最後に今回の報告を薦められた水野弘造氏に深謝する。

(さいとうたくみ)

### ちょっと気になる甲虫の情報(III)

最近では地方同好会誌に、新種の記載や注目すべき分類学的知見が発表されるようになってきた。それ自体は、地方同好会のレベル向上の面から喜ばしいことではあるが、重要情報の伝達・浸透という点では偏りが懸念されるものともなっている。今回の内容は、平野幸彦氏の研究成果で、『神奈川虫報』という地方誌に発表されたため、より広くより多くの人に知ってもらうことを目的に、要点を再述し、かつ筆者の調査結果を付け加えたものである。詳細は、平野(1995)を参照されたい。

(水野)

ヒゴツツナガクチキムシ *Hypulus higonius* LEWIS, 1895

ヒゴツツナガクチキムシの検討

水野 弘造

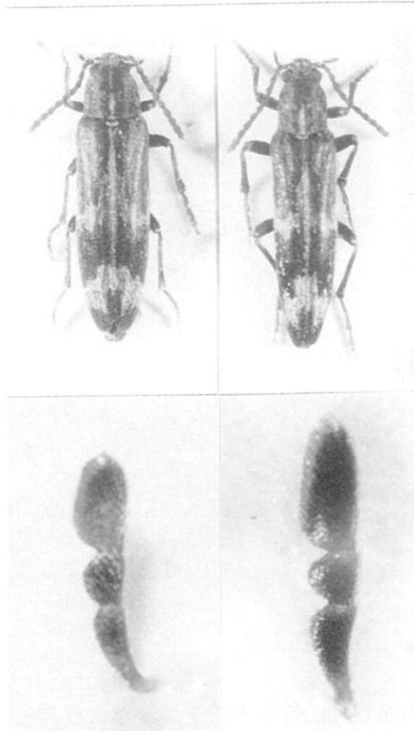
〒611 宇治市木幡熊小路 19-35

*Hypulus* 属のナガクチキムシは、Lewis(1895)によって日本から3種(*cingulatus* ネアカツツ、*acutangulus* トゲムネツツ、*higonius* ヒゴツツ --以下もナガクチキムシを省略--)が記載された。このうち *cingulatus*、*acutangulus* の2種は、野村(1963)、佐々治(1985)が原色図鑑に図示したためポピュラーな『珍種』として広く知られるようになった。残る *higonius* については、Nikitsky(1989)が図示するまで、林(1957)による写真付きの採集記録(和名カクムネ)がほとんど唯一の報告だったようである。標本の多数入手が困難なことも起因してか、*higonius* を研究対象にとりあげて *acutangulus* との差異



を明確に論じた報告は、平野(1995)まで待たねばならなかった。

筆者は1984年に London の Natural History Museum にごく短時間立ち寄り、Dr.Brendell の案内で、G.Lewis の採集記載したナガクチキムシの標本箱を見る機会をもった。 *Hypulus* 属3種のタイプ標本もこの時見たが、 *higonius* のタイプは100年を経たとはとても思えぬ白斑の発達した見事な標本で、筆者はとっさにこれをトゲムネツツの白化異常型と判断した。時間の関係で検鏡比較などしたわけではなく、当時所持していた4・5頭のトゲムネツツを思い浮かべて、独立の別種ではないと直感したのであった。現在調べ直してみても判ったのであるが、4・5頭しかなかった所蔵のトゲムネツツの標本はその時点で既に *acutangulus* と *higonius* との混成であって、トゲムネツツは変位幅の大きい種との先入観念ができあがっていたためである。したがって、軽率なことであったが、日本のナガクチキムシの都道府県分布表を作成するに当たって、 *higonius* は *acutangulus* のシノニムとして取り扱った(水野 1992)。



右トゲムネツツナガクチキ；左ヒゴツツナガクチキ（下図はmaxillary palpi）

平野(1995)は、 *acutangulus* と *higonius* の形態的差異を多面的に明らかにしたが、最も顕著な差異は maxillary palpi 先端部に見られ、先端節の細長い方が *acutangulus*、短小な方が *higonius* とした(付図)。

上翅斑紋は既に Nikitsky(1989) が図示しており、これによって標本の照合をすると、平野の見解は正当である。多数の標本を検したところ、上翅斑紋が Nikitsky の図示のように一目瞭然という例は希で、多くは斑紋による区別が困難である。体色も傾向としては *acutangulus* が黒褐、 *higonius* が赤褐といえるが、両種ともにまぎらわしい色のものがある。maxillary palpi の先端節は、標本からとりはずして、きちんと同じ角度から見て測れば、正確に両種の区別ができそうであるが、乾燥標本のままで検鏡すると、見る角度が一定しないためか、どちらに同定すべきか迷う場合も少なくない。恐らく、 *acutangulus* ♂と *higonius* ♀ならば長短が明瞭であるが、 *acutangulus* ♀と *higonius* ♂の場合、その差異が小さいものと推量される。

筆者が過去にトゲムネツツと同定記録したものについては全て再検の必要が生じたため、手元の標本と借用できた標本について、その結果を示しておく。一応 *acutangulus*、 *higonius* の両種とも、本州・四国・九州の分布が確認できた。各地のトゲムネツツの過去の記録については標本再検視による確認発表が望まれる。平野の推定したように、分布勢力として *acutangulus* が北に、 *higonius* が南にという構図になるや否や興味のもたれるところである。なお、平野によれば、原色図鑑に図示された標本の内、野村(1963)の示したものは正しく *acutangulus* であるが、佐々治(1985)のものは *higonius* である可能性もあるということである。

ここに掲載した写真は、平野(1995)の報文に使用されたものを同氏の御厚意で転載させていただいた。記して篤くお礼申し上げる。

ヒゴツツナガクチキムシ *Hypulus higonius* LEWIS  
1ex. 熊本県白鳥山 6.VI.1990 西田光康採集

トゲムネツツナガクチキムシ *Hypulus acutangulus* LEWIS  
1ex. 熊本県白鳥山 2.VII.1988 西田光康採集

1ex. 愛媛県楢原山	2.VI.1991	白石正人採集	1ex. 愛媛県東赤石山	9.VII.1995	白石正人採集
1ex. 愛媛県石鎚山	25.V.1986	白石正人採集	2exs. 愛媛県楢原山	2.VI.1991	白石正人採集
1ex. 愛媛県石鎚山	14.VI.1986	白石正人採集	1ex. 愛媛県石鎚山	11.V.1986	白石正人採集
1ex. 京都市杉峠	31.V.1959	岸井 尚採集	3exs. 和歌山県高野山	8.V.1994	大垣 誠採集
1ex. 京都市杉峠	2.V.1986	巽 和政採集	1ex. 奈良県大峰弥山	5.VII.1981	水野弘造採集
1ex. 奈良県大台ヶ原	16.VI.1985	水野弘造採集	6exs. 奈良県日本岳	22.VII.1979	水野弘造採集
2exs. 神奈川県大湧谷	26.V.1984	根本圭介採集	1ex. 山梨県転付峠	29.VII.1969	土居祥兌採集
1ex. 山梨県御坂山	18.VI.1988	水野弘造採集	2exs. 山梨県乙女高原	18.XII.1986	沢井 稔採集
1ex. 山梨県御座石湯	14.V.1990	細田倅市採集	1ex. 山梨県御座石湯	4.VII.1995	細田倅市採集
1ex. 福島県松原峠	28.VI.1988	中村 司採集	1ex. 長野県御岳	13-14.VIII.1989	山下俊一採集
1ex. 福井県夜叉ヶ池	13.VI.1982	林 靖彦採集	1ex. 福島県松原峠	29.VI.1988	中村 司採集

## [引用文献]

1. 平野幸彦. 1995. 神奈川虫報, (111): 25-28, figs.
2. LEWIS, G. 1895. Ann. Mag. Nat. Hist., 6(15): 269-270.
3. 野村 鎮. 1963. 原色昆虫図鑑(II), 243, pl.122, fig.8, 北隆館
4. 佐々治寛之. 1985. 原色日本昆虫図鑑(III), 371, pl.64, fig.2, 保育社
5. NIKITSKY, N.B. 1989. Arch. Zool. Mus. Moscow St. Univ., 28: 65-66, fig.13.
6. 林 匡夫. 1957. Nature Study, 3: 131, fig.
7. 水野弘造. 1992. 関西甲虫談話会資料, (3): 1-63.

(みずのこうぞう)

## ちょっと気になる甲虫の情報(IV)

ダイモンテントウ *Coccinella hasegawai* MIYATAKE

## ダイモンテントウに関する知見

斎藤 昌弘

〒913 福井県坂井郡三国町三国東4-3-2 3-1 1 5

ダイモンテントウ *Coccinella hasegawai* MIYATAKE は日本特産の希な高山性の中型テントウムシとしてよく知られており、雑甲虫屋のあこがれの一つであった。これまでの記録は少なく、ウルップ島・択捉島・長野県豊科・北ア烏帽子岳・北ア常念岳・北ア大滝山・北ア中房・北ア奥穂高・甲斐駒ヶ岳・木曽駒ヶ岳・木曽御岳・南ア鳳凰山等が知られ、他にも未公表の産地が数カ所ある程度である。いずれも標高2500m以上の北・中央・南アルプスで、幾つかの採集例では頂上付近の尾根で吹上と思われる1~2頭といった具合で、他の中型テントウムシのように発生場所で簡単に複数得られるものではなかった。当然、成虫の生活史、あるいは幼虫の形態は全くといってよい程なぞに包まれていた。筆者も雑甲虫屋の一人としてこの種に大変興味を持っていて、恐らくはハイマツに依存しているものと予想し、数年来、鳳凰山で探索していたが成果は上がらなかった。

今回、親しくしているH氏より中央アルプスで1頭採集、更に96年には他地でハイマツより2頭たたき落としたという情報が入った。そこで7月中旬には情報のはいった中央アルプスへ出掛け、ハイマツをたたき回った。結果は38頭の成果。後日同地を訪れた友人も11頭採集した。これら



の成果によって、ある程度の成虫の暮らしぶりが判明したので、以下に報告しておく。今後の分布調査の手掛かりにして頂ければ幸甚である。ただし生態調査として満足できるほどには詳細な観察ができていない点はご了承頂きたい。なお、採集地は国立公園特別保護地域外である。

前述の予想通り、成虫の生活舞台はハイマツであった。とはいっても無論ハイマツを食しているのではなく、ハイマツにつくアブラムシ（種名は確認できていない）を食している可能性が高い。まずはアブラムシがついている事が最低条件であるが、ハイマツ自体もある程度選択されるらしく、どんなハイマツでも採れるとは限らない。多数得られる株の隣でもほとんど得られないといった具合である。好まれるハイマツの条件としては①地面に伏しているのではなく、腰の高さ程に枝が上がっている事②開花しておらず、又成長した松かさがついておらず、若い株である事③尾根であっても直接強風が当たらない事等。最も個体数の多かったのはカール状地の沢の頭であった。本種が多産する為には一定の広さのハイマツ帯が必要のようで、南アルプスの鳳凰山ではハイマツ帯が細く、絶対数は少ないと思われる。成虫の発生期は永く、過去の採集例では早いのは7月初頭で遅くは9月末の記録がある。筆者が採集した7月中旬は発生の最盛期であろう。風の強い日には尾根へ飛ばされている個体がみられ、従来はこのような個体が偶然に採集されていたのであろう。分布は現在までのところ、本州中部の高山帯と千島から知られ、なぜか北海道からは未知である。本州中部の高山帯は今のところ北・中央・南アルプスの標高2500メートル以上のハイマツ帯に限られる。ただ鳳凰山では落葉針葉樹林帯で1頭得られているが、これは南アルプスの森林限界が高い為と、本来の生活環境からの飛来と思われる。北海道・東北地方・八ヶ岳・白山及び立山での分布確認を是非とも望みたい。（北ア折立て峠上部での簡単なたたき網採集では得られなかった。）

形態的には上翅斑紋が和名にもなっているように橙色地の独特の逆さ「大」の字形成が基本であるが、前方黒紋が融合した *ebosiana* 型が知られ、今回採集した38頭の約半数はこの型であった。他には顕著な斑紋変異はなく、この2型に分けられる。体形は同属の他種より扁平であるが、これは強風時に葉のすき間に逃れる為の適応であろうとも言われている。

幼虫は未知である。今回成虫を採集した7月中旬では全く姿を見なかった。7月末に同地を訪れた採集者によれば、ハイマツからテントウムシの若令の幼虫が2頭観察された。筆者はお盆に鳳凰山のハイマツで中令幼虫を採集し、これらは状況を考えると本種の可能性が高い。なおこの標本はしかるべき研究者に資料として提供しており、ここでは形態を記述しない。恐らく終令幼虫は8月末に現れるものとする。

かつての珍種も採ってみればやはりテントウムシであった。生活圏には他のテントウムシはおらず、せいぜいハイマツ帯下部のお花畑にナナホシテントウが見られるくらいで、ハイマツ帯は本種の独占場と言ってよい。来シーズンにはさらに観察を続け、とくに終令幼虫や蛹の確認に努めたい。

#### [参考文献]

MIYATAKE, M., 1963. Descriptions of two new *Coccinella* species of Japan. *Ins. Matsu.*, 26(1):49-53.

SASAJI, H., 1971. *Fauna Japonica, Coccinellidae.*, 340pp.(254-255).

(さいとうまさひろ)

## 虫屋の広場(2)

-- 虫屋のお宿--その1 南アルプス鳳凰小屋 (細田倅市氏経営) 探訪記

1960年代、徳本小屋には、小松康さんという特徴ある山小屋主人が居て、夏のシーズンともなる多数のむし屋・やま屋がたむろしたものである。私(水野)も何回かそこに出掛け、何人ものむし屋



御座石鉱泉

さんとの出会いがあった。むし屋のたまり場となる宿は、ネクラ傾向の強いむし屋にとって貴重な社交場でもある。今回は小屋の主人自身が甲虫採集家でもある鳳凰小屋を訪ねてみた。

平成年代にはいって鳳凰山を模式(完模式・副模式)産地とする甲虫が多数記載されている。

*Anotylus hosodai* ITO, *Oxytelus houomontis* ITO, *Nazeris validus* ITO, *Nazeris masahayashii* ITO, *Lobrathium mizunoi* ITO, *Gabrius schillhammeri* SHIBATA, *Hesperus ignoratus* ITO, *Heterothops ishiharai* ITO, *Carphacis paramerus* SCHÜLKE, *Lomechusa hosodai* SAWADA (以上ハネカクシ), *Houwau alpicola* KISHII, *Oedostethus hosodai* KISHII,

*Fleutiauxellus houwau* KISHII, *Miquasus kai* KISHII, *Gambrinus hosodai* KISHII, *Kibunea kouichianus* KISHII, *Kibunea narukawai* KISHII, *Ampedus alpinus* KISHII, *Ampedus hosodai* KISHII, *Ampedus houwau* KISHII, *Ampedus gozaishi* KISHII, (以上コメツキムシ) etc.

現在のところ、ハネカクシとコメツキムシで占められているが、他科の新種も追々発表されよう。これらの大部分は細田倅氏の採集品によっており、明らかにされた同山の甲虫は2400種に達している。動物写真家として著名な同氏はランやキノコをはじめ植物にも詳しく、したがって昆虫の採り方を尋ねれば実に的確な回答が即座に返ってくる。ただ、中には鳳凰小屋の前に一日座って居れば、前庭にはい出してくるのでそれをつまみあげればよい(ホウオウミズギワコメツキ *Fleutiauxellus houwau* KISHII)というような採り方もあって、2-3泊の登山客の時間の使い方にはマッチしないものもある。

1996年8月15日朝、御座石鉱泉(標高1117m, ここまで自動車で入れる)に投宿していた伊藤・水野の二人は台風之余波による雨の上がり切らぬ空を眺めて、鳳凰小屋への登山を半分あきらめていた。そこに福井から斎藤昌弘氏と東京から鎌倉正人氏の二人の甲虫屋が到着、つられて登山することになった。季節がすでにピークを過ぎ、雨と風で虫の姿は見当たらず、ひたすら登山に集中し、ほぼ標準時間(6時間)で鳳凰小屋に到着。水野は一年ぶり、伊藤は七年ぶりで細田氏に再会。夜はランプの下でコタツを囲んでの五人の甲虫談話会となる。翌8月16日は快晴となり、左脚を痛めてダウンした水野を除いて思い思いに採集を楽しんだ。夜の再ミーティングでは各自の成果はもうひとつということだったようだ。お盆休みという期間のため細田氏は小屋のさい配に多忙で、虫採りどころではなかったが、日ごろから採りためてあるタトウにはオオキカワムシが20頭も並んでいたり、タニグチコブヤハズ・ヒメコブヤハズ・シラホシヒゲナガコバネ・チャイロヒメコブハナ・タカネヒメハナなどのカミキリや当山で2頭目というダイモンテンノウなど目を楽しませる材料には事欠かない。しかし当山の甲虫の真価はこれら一目で分かる著名甲虫にあるのではなく、タトウの片隅に眠るチンケな"名も知れぬ"雑甲虫にある。著名甲虫はタトウに残して、微小甲虫をもらい受け、これらを専門家の目に通すのが水野・伊藤の役割である。かく



鳳凰小屋



して8月17日、水野は左脚をかばいながら、伊藤は落ち葉をふるい集めながらの下山となった。なお末筆ながら、今回の採集行で次の種が落葉下から得られているので報告しておく。

キバラチビオオキノコムシ (*Triplax flaviventris* TÖYAMA et KINUGASA) Iex., Gozaishi Spa (alt. about 1700m), Yamanashi Pref., 17.VIII.1996, TATEO ITO leg.

参考までに宿泊料は御座石鉱泉12000円、鳳凰小屋6500円(1996年)の見当。山の傾斜は急であるが、自然度の高い森林中をくぐる登山路は良く、中高年登山者の率が高い。(水野・伊藤)

### 虫屋の広場(3)

#### ハネカクシ談話会の発足

千葉県立中央博物館の、ハネカクシ群研究者、直海俊一郎氏の提言により、6月23日、同博物館にて第一回目の例会がおこなわれた。参加者は15名で、ハネカクシ・アリヅカムシ・チビシテムシなどの研究者以外にも環境調査関係者や土壌生物研究者など生態系に関心のある者の参加もあった。日本のハネカクシ群は特に土壌性のものを中心にまだまだ未解明な部分が多く、環境の悪化がこれ以上進まないように早急に研究を進めなければならない。そういう意味でハネカクシ談話会の発足は時宜を得たものといえる。今後はお互いの親睦を図りつつ情報や資料の交換などが図られるものと思う。また、年2、3回の例会(採集会を含めて)が開催される予定。参加者も近畿から北海道に互っており、11月には採集会も計画された。(連絡先: 千葉市中央区青葉町955-2 千葉県立中央博物館 直海俊一郎 方)。(林 靖彦)

## 会報

## 第47回(1995年度)大会記録

第47回大会は大阪市立自然史博物館において1995年12月10日午前10時から開催された。午前中は例年どおり、自由懇談と同定などが和やかな雰囲気で行われた。

午後1時から総会が開会され、本会発足以来長年にわたり会務を担当され会の発展に尽力された大倉幹事並びに編集委員として活躍された石田裕氏の御冥福を祈り、黙祷をささげた後、林(匡)幹事から人事案件の提案と会務報告が行われた。人事案件では新幹事として林 靖彦・伊藤建夫両氏が本総会で承認され、会務報告では評論は50巻2号を大倉・石田両氏の追悼号とし、51巻以降はB5版へ移行し、「ねじればね」は内容の充実を計る等が報告された。

その後記念講演に入り、伊藤建夫氏より”ラオスの自然と昆虫”，伊藤 昇氏より”タイ北部の昆虫”と題し、美しいスライドをまじえての講話があった。

講演後は、1966年以降の学会の運営上の諸問題(運営体制と人事、会誌の編集、会計面での赤字解消等)が林(匡)幹事から提起され、今後の会運営の参考にするため、出席会員で忘たんのない意見を出し合った。多数の会員より建設的な意見が出され、幹事会でこれらの意見を検討して行くことになった。

大会終了後、例年どおり有志による懇親会を開催。当日の出席者は下記の通り(敬称略※は懇親会出席者)。

藤田國雄	※春木 實	春沢圭太郎	畑山武一郎	※林 匡夫	※林 靖彦	廣田嘉正
穂積俊文	※生谷儀一	今坂正一	※伊藤 昇	※伊藤建夫	蟹江 昇	岸井 尚
※水野弘造	森 和夫	森内 茂	三木三徳	※奈良 一	生川展行	※野村英世
大石久志	※大川親雄	奥田則雄	※澤田高平	※佐々治寛之	※初宿成彦	高羽正治
※八木正道	山地 治	山下 晶	横関秀行	※吉川正彦	吉田元重	他1名不明

(野村 記)

発行: 1996.12.15 日本甲虫学会

〒558 大阪市住吉区菟田2-16-5 レジデンス寿202 林 匡夫

Tel: (06) 698-2964 振替口座: 00990-8-39672

ねじればね原稿送付先

〒611 宇治市木幡熊小路19-35 水野弘造 Tel 0774-32-4929

〒614 八幡市男山雄徳8 E 7-3 0 3 伊藤建夫 Tel (Fax) 075-983-3491